

知恵の樹

110号

2006.4.20

国松俊英氏・出版100冊を祝う会

武井澄子

会員であり児童文学作家の国松俊英氏が、100冊目の著書『フクロウの大研究』を上梓された。その出版をお祝いする会が、ご本人の意向を汲みささやかに市民11名、図書館職員4名の会員と国松さんの親しい編集者の方2名も加わって開かれた。皆で美味しい料理とお酒に舌鼓をうちつつ、単著で100冊目を刊行された偉業を称えた。

以前、氏が当会報に連載したエッセー「いつも図書館で本を読んでいた」によると、山好きな学生時代、山小屋でアルバイトを続けた事、そこから自然・野鳥観察へとつながった事、そして“人生は一度しかない”と就職した会社を退職し、作家の道を歩き始めた経緯が細かに記されている。また現在に至るまでの執筆分野も、主役の動物・鳥の他に科学読み物、図鑑、知識読み物、伝記などのノンフィクション、創作童話、紙芝居まで多岐にわたる。1975年、第1作の「ホテルの町通信」(偕成社)から今日まで、共著を加えると実に130冊を超えるのである。その中には読書感想文の課題図書指定やサンケイ児童出版文化賞受賞などの榮譽を担う本も含まれる。

エッセーのなかで司書の私が嬉しかったのは、資料調べで船橋市立図書館、国会図書館、そして町田市立図書館など利用大いに援けられた、図書館は氏にとって無くてはならない物と記されていた事である。

また当夜の楽しい話題として、児童書の編集者仲

〈呼びかけ文〉

寒さに震えている間にはや桜の満開に驚かされます。さて、当会会員の国松俊英氏が3月27日『フクロウの大研究』を上梓されました。

カラス、スズメ、ハト、ツルに続いて「鳥の大研究」の5部作となり、また童話からノンフィクションまで、多くの著作品の100冊目になりました。おめでたい100冊目出版を記念して、国松氏を囲みささやかなお祝いの会を持ちたいと思います。どうぞ参加ください。(伊藤)

時：4月12日(水)午後6時から

場所：おなじみの「熊」さん



間は出版社のワクを越え親しく付き合っていること、「水質検査隊」(水質とはアルコール!?)と称して旅も勤しんでいるとか。

児童書で難しいのはタイトルのつけ方で売れ行きを左右するが、タイトルには著作権が無いので似たタイトルを付けられる事もある、とやや憤慨気味のご様子。でも最近スズメが原因不明で760羽死亡したニュースには顔を曇らせる、やさしい氏の素顔を垣間見せられた。

記念すべき100冊目の「フクロウの大研究」のサイン本と100冊リストを参加者全員にプレゼントされ、皆大感激であった。氏にはお祝いの気持ちとして花束、ルーペ、お祝いコメント集を贈呈し、今後の更なるご活躍をお祈りして幕を閉じた。(会員)



広瀬恒子さんのどの本読もうかな？

去る3月14日(火/10:30~12:30)町田市立中央図書館に於いて、講師広瀬恒子さんによる当会恒例となった表記の会を催した。

皆さんお待ちかねとあって、リピーターの顔・顔・顔。水越さんが今年度も作成してくれた引用本の素敵なカラー資料 50部はたちまちなくなり足りなくなった程。広瀬さんは、広く子どもの本を研究していると共に、自ら文庫・読書会を開き子どもたちと接しておられるとあって、子どもの心、親たちの状況も踏まえたユーモアあふれるお話の展開で、奥の深い講演会であった。

当日のレジュメを追ってご報告したい。

◇2005年出版界の話題から

・出版界全体としては低迷傾向で書籍の返品率は43%と高い/ ・7月には、読書推進を支援する「文学・活字文化振興法」が成立した/ ・桶川に「出版流通改革」を旨しトーハン桶川SCMセンター(サプライチェーン・マネージメント)がオープン/ ・書店員のおすすめ“本屋大賞”が本のPRに一役かう傾向があり、『博士の愛した数式』(小川洋子)の文庫版が104万のミリオンセラーハイペースになった。

◇子どもの本の周辺では

・一定の評価を持った作品が出てきた。殆どが2~3年で消えていくが、今、生きてい

る子どもはその新刊に出会う/ ・新訳ラッシュであった。『星の王子さま』は、1953年 内藤濯訳で岩波少年文庫の一冊として出版され半世紀にわたって読まれてきたが、作

品の翻訳権切れで新しい訳による本がいっせいに登場/ ・『あらしのよるに』『チョコレート工場の秘密』



『ゲド戦記』などが映画が/ ・荒井良二がアストリッド・リンドグレン記念文学賞を受賞

◇子どもの本の2005年発行点数調査にみる動向

総点数=3787点(前年3742点)内、過半数は絵本。(絵本=1747点(46%) /文学=926点(24%))

●特徴的な動きとしては、国内外を問わず貯金を取り崩したような再刊が活発な年だった。また、自費出版の本が目立った。

・再刊の児童書の例として、絵本では『ぼうぼうあたま』『スモールさん シリーズ』『トーマス』『のでので』『祇園祭』。物語では、「ロアルドダール」コレクション『チョコレート工場の秘密』、「アンデルセン童話」「めぐりめぐる月」、宮澤賢治、新美南吉、坪田譲治、赤川次郎シリーズ、などの作品。

・『私のアンネフランク』『ぼくらのサイターの夏』『空色勾玉シリーズ』が文庫本化された。

初訳に手を加えたり、表紙やデザインを変えたもの、ハードから文庫本化など再生の仕方もいろいろある。

・YA(10代)対象の絵本が倍増した。『悲しい本 SAD BOOK』(30万部出た) 『赤い大地黄色い大河』『シャカ』『雲の歌風の曲』『ブライディさんのシャベル』

◇内容面から

絵本 …点数の多い割には不振な年であった
・ストーリー性のあるものより場面ごとに問かけ、楽しむ対話型の方が

元気。例：かけあい絵本『おどります』、誰が好きと問かける『ねえねえ』、一場面一場面を楽しむ細密な絵『まってる まってる』、問かけをしながら特性を描く『からすのはてな?』。

・おはなしと絵がマッチしていたのは、『くものすおやぶんとりものちょう』『ダンデ ライオン』



『せかいでいちばんつよい国』などで、バランスが取れていて楽しめた。

●伝記的絵本が促進された。『シャカ』『まぼ

ろしのデレン間宮林蔵の北方探検』『生命の樹 チャールス ダーウィンの生涯』『絵本アンネ フランク』『レイチェル』『海時計職人ジョンハリソン』、ツインタワーを一本の綱で渡りきった『綱渡りの男』など。筆者のどういうところを伝えるかの目が働いている。読み手は写真と違って画家の主観が入り、絵の制約を受ける。絵本をどう評価するか考えねばならない。



●写真絵本…読み手にも事実ではあるが真実かどうかは分からないという新たな発見をたのしめる。

雪の写真家ベントレーの版画は、好評だった。

『渡りをするチョウ』『およげなかったカバ「モモ」』『あかちゃんてね』『被爆者』、町田の国松さんの本『ツルの大研究』、などが出された。

よみもの

昔幼年文学があったが、今は殆ど見当たらない。

・低学年～中学年 『ソフィー やりぬく女の子ソフィーの物語』『おともださにナリマ小』『おさるのやま』『てんぐのそばやは本日開店』『よこづ



なになったクリの木』『ツルの大研究』『バサラ山スケッチ通信一山のくらしと動物たち』『ラモーナ 明日へ』 から

・高学年以上

●戦後60年のふし目に、記憶を風化させない努力の『写真が語る第一次世界大戦』『語り伝える ヒロシマ・ナガサキ』『被爆者 60年目のことば』『戦

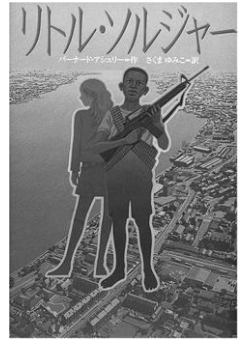
争が終っても ぼくの出会ったリベリアの子どもたち』『ダイヤモンドより平和がほしい』『描かれた戦い』など。

●よみものに描かれた人間と命…子どもが戦わざるを得ない現代の戦争。/ 絵本『紅玉』『フルーツドロップ』『少年は戦場へ旅立つ』

『リトルソルジャー』

●児童文学のおもしろさ…今の子どもにとっての身近さ/日記を媒介にした『ハッピー・ノート』、ソフトボール部にいるのは気楽だから

と居場所に価値を置く『ハチミツドロップス』/ストーリーが興味をひきつける、『みつばち』(4つの話が入っている)、『おわりから始まる物語』



●主人公の存在感がある…『風神秘抄』『蒼路の旅人』『なまくら』『かはたれ』。

●海外作品にみる児童文学のバック・ボーンに、D・キング・スミス、R・ウェ



ストール、J・ウィルソン、B・クリアリー (30代にヘンリー君、ラモーナは80歳代で書き、今も元気で子どもとしての存在を示してくれる) がいる。

大人が、子どもたちに本が手に取れる環境をさりげなく押し付けることなく保障していける、より

平和で豊かな社会にと願う。

最後に、「ちきゅうぎを見て」(6才の子の詩) という詩を紹介してくれました。

ママ アメリカは カナダのとなりだからさ「カナダくんあそぼ」っていつてき

ニッポンは 中国のとなりだから

「中国くんあそぼ」っていったらいいのにね

(増山)

アジアの絵本へのまなこ

～日・中・韓・台湾についての絵本の現状～



去る4月16日(日)13:30より、絵本作家・和歌山静子さんの講演会を3時間にわたって中央図書館ホールにおいて開催しました。和歌山さんは、アジアの国々が大好きで、現在手に入る最高の絵本約500タイトル各3冊ずつの1500冊近くを集められ、メディアリンクス・ジャパンを通して絵本ライブラリーとして希望者に貸出をしております。今回残念ながら、絵本ライブラリーを開くことはできませんでしたが、ダンボール1箱分の絵本を持ってきて見せて下さりながら、アジアの絵本の状況と平和に寄せる熱い思いを語っていただきました。

会場には、韓国の絵本を読んでくださる金さん(鶴2小で読み聞かせをされています)とそのお友達もお子様連れで参加してくださいました。PR不足からか、あるいは日にちが悪かったのか、会員10名、他15名ほどのこじんまりした集いでしたが、急遽、先生の演卓を囲むような形に椅子を動かして、小人数ならではのアットホームな有意義な会となりました。(M)

ルト1・2・3』の丁寧に作られた本等を紹介してくれました。中国は薄い絵本で、アニメの影響？のような絵のものもあるとのこと。『おおかみのおばあさん』(ファン・イーミン)や『桃源郷』(サイ・コウ)等、力のある絵本画家はいるようですが、まだまだ出したい本が出せない社会事情があり、また初版を出すとそれ以降は出版しないお国柄だそうです。

お話から

丹羽奈津子

04年に日本で開催されたアジア児童文学大会がきっかけになって、アジア絵本ライブラリーを開設されている和歌山さん。挿し絵では『王様シリーズ』(寺村輝夫)、作品では『ひまわり』(福音館)で有名で、



台湾ではたくさん日本の絵本が翻訳出版されているようで、和歌山ライブラリーにも、100タイトルの絵本があります。各国を何度も訪問しているご経験から、絵本は言葉が解らなくても絵で理解でき・交流で



太くて元気な線の絵はご記憶にある方は多いと思います。

～アジアの絵本の現状～

現在、日本の絵本でアジア上記4カ国全部で翻訳出版されている本は『100万回生きたねこ』(さのようこ) 『わにさんどきつ はいしゃさんどきつ』(ごみたるう)だそうです。日本では今たくさんの絵本が出版されていますが、

よく考えて作られている絵本は少ないと思われるそうで、その点、韓国では地に足が付いている絵本を作っていると言われ、2000年に国際子ども図書館オープン記念でできた韓国絵本原画展の冊子の中から、『韓国キ

きると言われ、中国でも日本語で読み聞かせをされるそうです。

5歳で終戦を迎えられ、子どもの頃の焼夷弾などの戦争体験が、生きる上での原点である



『仔牛の春』

と話され、日本児童出版美術家連盟が40周年記念に作った『月刊保育絵本クロニクル—絵本に見る子どもの背景』から、戦前と戦後の変遷ぶりを取り上げられました。また、日本がイラクへと自衛隊を送り出した時、戦争に反対するアピールとしてのアクションとして絵本画家の方たちが結集して出された



『世界中の子どもたちが103』出版の経緯を話されました。前半の終わりに、絵本『仔牛の春』（ごみたろう作）と、日

『ソリちゃんのチュソク』 本のお盆の帰省と同じ状況を描いた『ソリちゃんのチュソク』（イ・オクベ作）を、会員と金さんが1ページずつ日・韓語で交互に読みあいそれぞれの言語の美しさ、絵本の違っているところなどを楽しみました。

～和歌山さんの絵本のこと～

和歌山さんがどういう風に絵本を作っていたかのお話もお聞きすることができました。唯一息子さんのために作られたという『ぼくのはなし』（3冊シリーズ、山本直英監）は、相次いで親しい人を亡くして落ち込んでいた時、5歳だった息子さんにふと「生まれてきてよかった？」と聞いた会話が、作品が生まれる発端だったとか。「よかったよ」「どんなことが良かったの？」「ぼくはぼくでよかったよ」というのを聞いて、ああ産んで良かった、息子も生まれてきたことを認めてくれたということテーマに絞って出来上がった絵本だそうです。この絵本は、どの辺まで子どもの気持ちになって絵が描けるか、が勝負だったとかで、セックスの場面もきちんと書いています。男の人は余り好まれませんが、知的障害を持った子どもの性教育にはとても分かり易いと喜ばれ、「生きる」がテーマで（よい絵本）にも選ばれたそうです。

また生きるとは対極の死をテーマにした『よあけまで』（原題は『守夜』/曹文軒作・中由美子訳）という二人の孫を残して死んでしまったおばあさんを、残された子どもたちだけでお通夜をするという、絵本も手がけられています。

最後に会場から、インターネットはじめ、昔とは比べようのないくらい多い、子どもたちのまわりの間違っ性情報の中で、『ぼくだけのこと』の様な作品は是非子どものそばにおいて、一緒に読んであげたいと、いう声があがりました。3時間があっという間に過ぎました。

<参加者の感想>

「会に参加できてとても良かった。ぜひ、他の催しも、もっと早くに知らせて欲しい」

「お子さんたちが、会の始まる前に絵本に読みふける姿が素敵でした」

「（日本の若い人たちは）戦争のこと、ぜんぜん知らなかったの、その話が聞けてよかった」

「絵本のことがよくわかってよかったです」
などなど。

—報告— 「母と子のわらべうたあそび」

ことばのリズムを楽しむ

かえで文庫 太田 晶子

去る3月15日、成瀬センター内のかえで文庫にて同文庫主催による「わらべうた」の講座を開きました。講師は、柚山明子さん。

今の時代はいろいろな音であふれ、せわしげに益々スピード・アップしています。

でも子どもの育つ時間を短縮することはできません。はじめて出会う言葉やリズムが心地よいものであってほしいという願いをこめて、かえで文庫では6年前から月に1回、乳幼児と一緒に楽しむ「おはなしぐるんぱ」を開いています。

今回は、「わらべうたあそび」を全国的に採譜、伝承活動をされていらっしゃる柚山明子さんをお迎えしての会を持ちました。

7ヶ月の赤ちゃんから3歳児まで、双子さんを含む13人の子どもとお母さん、そして17人の大人、計42名で楽しいひと時をすごしました。

カリバのやさしい音色が静かに流れると、それまでザワザワしていた会場は次第にやわらかな雰囲気となり、お母さんの膝に抱かれている小さな子たちも静かに聞き入ります。

柚山さんの横にある小さな台は布で覆われています。何が入っているのでしょうか。ワクワクしていると、「ジージーバア」とふわふわしたスカーフから顔をだし、つづいて熊ちゃんやお人形も出てきて「わらべうた」の世界へ誘ってくれます。近くでびっくりして泣き出した子も「だるまさんがころんだ」と木のだるまさんの転がる様子にご機嫌をなおして見とれていました。「どんだんばしわたれ」と歌と一緒に小さな動物・きつね、ぶた、うさぎなどが丸木橋をわたっていきます。「こっちのたんぼ、たんぼやあ…」でいないいないばあをし、「アンコ、ジョウ

ジョウ…」で顔遊び、「火、火たもれ…」は、お母さんが子どもの手にふれながら寝かせる時に静かに歌うといいですよ、とのこと。お手玉でもあそびました。皆で1つずつお手玉を持って「おせんべやいて…」とお砂糖かけたり、おしょうゆつけたりしてたくさん頂きました。そのあとは輪になり「あのね、和尚さんがね…」と愉快的歌にあわせてお手玉を送っていきます。はじめはごちなかつた子も歌っていくうちに上手にリズムにのって左から右へとおくれるようになりました。オレンジ色や、花柄、猫型などいろいろなお手玉が大きな輪になった皆の手の中をわたっていきました。母子の輪の隣には大人だけの輪も出来て、楽しそうでした。

柚山さんの吹くオカリナが「お月さまえらいの」と「ののさまなんぼ」が繰り返され私たちは頂いた楽譜を見ながら静かに歌います。単純なリズムの繰り返しは自然に体が揺れてきて、心地よい世界に入っていました。この繰り返し、繰り返しの中で本当に眠ってしまった子も何人か。動きまわったり聞いていない様でも、この雰囲気と一緒にわらべうたが子どもの体の中に入っていくのを感じました。子どもたちが温かいイメージを育みながら大きくなっていきますように。

「おはなしぐるんぱ」は毎月第2水曜日10時から11時まで、成瀬センター内のかえで文庫で、開いています。どうぞおでかけください。

学校図書館・新図書指導員のつづき **プラス思考で前進！…できるかな？** M・Y

新・旧指導員の引継ぎがあった。そのとき、「この学校の子たちは、しつけがなっていない、あいさつができない、本を乱暴に扱う、掃除ができない…」など、～ができない、という否定的なことばが指導員や先生から出てきて、とても気になった。しかし、新学期が始まり実際に子どもたちと接すると、聞いていたのとは違って、掃除当番の子もとてもよくやってくれる。確かに遊んでしまう子もいるが、こちらのことばかけひとつで、ほんとに良く動いてくれる。図書委員会も始まり、率先して私が動いていると、一緒に本の整理も手伝ってくれ、やる気も充分ある。

はじめて入った図書室は、年度替りもあるせいか雑然として殺風景だった。低学年の子どもがゆったりと絵本を読むスペースとして畳やじゅうたんの読み聞かせコーナーもあるが、上履きのまま上がるからと、片付けてしまっている。できないから、よごすから、と使わせないのではなく、なぜ、気持ちよく皆が使えるように指導しないのだろう。せっかくのコーナーがもったいない。

書棚を見ると、読み物に関しても社会や理科の資料にしても、とにかく本が古い。そして少ない。本には分類番号が貼ってあり、あった場所に戻すよう指導がなされていたようだが、子どもが自分で戻すためには、もっと工夫が必要なのではと思う。また、本の管理が出来ていないためか、年度変わりで全て返却してあるはずの新刊本も、誰が持っているのかどこにあるのかわからない状態。このことは、子どもが悪いのではなく、管理を誰が(教師なのか指導員なのか)どこまでするのかがはっきりしていないことが原因のように思える。

学校の図書室に入るようになって、一番感じたことは、図書室には「大人」が毎日いることが大切だということ。指導員は、平均週4日、3日の時もあり、図書室に丸一日人がいない日がある。指導員でも、ボランティアでも、教員でも、できれば専任の人がいて、20分休みや掃除の時間、お昼休み、放課後なども、レファレンスとまでは言わないが、子どもの疑問(本について)に対応できるようになることを願う。職員が誰もいないのに開館している市立図書館などありえないと思うが、学校の図書室は、週に何日か、休み時間も子どもだけで貸し出し返却をしている日がある。そのことを、皆さんはどう思われるだろうか？子どもが本好きになるためには、子どもだけでは無理である。大人がうまく陰、日なたになって環境を整えることで、図書室の機能を活かせるのだから。

知人から、他の学校の図書室やその学校の指導員の待遇などを聞くと、学校によってとてもバラツキがあることが分かる。指導員の人数が違ったり、学校から頼まれたから仕方なくやっていたりと、指導員としての意気込みもかなり格差がある。それは、校長・副校長ら管理者や司書教諭が学校図書館をどのように考えるかで、違いが出てきているようである。全ての子どもに等しくという公立学校で、こんなに差があっているのだろうか？

指導員が全校に配布されるようになって6年目だとか。毎年毎年新しく指導員になる人も少なくないと思う。ゆえに研修会などもしっかり行って欲しい。今年度はまだスタートしたばかり。指導員や先生が替ったという学校も多いと思う。新指導員として、図書室が子ども達の好きな場所として記憶に残るよう心地よい空間を作り、いい本と出合えるように、奮闘しようかなあ。

町田の学校図書館を考える会

「弾き語りと朗読でたのしむ 子供の十字軍」

3月19日(日) 午後2時半～4時

中央図書館6階ホールにて 参加 45名

講師派遣制度を無駄なく使おうと急に決まった企画の為、宣伝が行き届かずどうなることかと心配でしたが、皆さまのお骨折りや当日の呼び込みも効いて思ったより盛況でした。

朗読の前に先ず、小寺隆幸さ

んによる第二次大戦下ポーランドの状況についての話を写真を見ながら聞きました。戦争ではユダヤ人だけでなくポーランド人、ドイツ人などの子どもたちもまた悲惨な目にあっています。ブレヒトが描いた詩「子供の十字軍」の中にも様々な出身の子供たちが出てきます。ブレヒトがこの詩を書いた背景についての解説でより理解を深める事ができました。

「子供の十字軍」はもとブレヒトが作った詩ですが、画家の高頭祥八氏がその詩に感動して原画を制作、絵本として出版しました。その後亡くなる前に高頭氏から原画を譲り受けた茂呂久美子さんが、原画のスライド映写・一鷲さんの音楽をバックに朗読する形で、この朗読コンサートができあがっています。胸を締め付けるような原画と11弦の響きが20分余りの哀しい物語をより一層印象深いものにしています。

最後は一鷲(いっしゅう)さんの弾き語りで(一鷲さんはなんか仙人みたいです!）、宮沢賢治の「座敷ぼっこ」や自作の歌などを楽しみました。参加の皆様にもそれぞれ楽しんでいただけたと思います。

(報告: 水越)

◇ 参加者からの感想(抜粋) ◇

・ぼくはとてもたのしかった また、みたいです。

(小2)

・とてもすてきでした。一鷲さん とても温かい声ですね。未来ある子どもたちに平和で生きやすい世界を残しておきたいですね。

・とても時間が短く感じました。日曜日の午後のゼいたくな時間をありがとうございました。小寺さんの解説もよく分かりました。資料もあり参考になります。

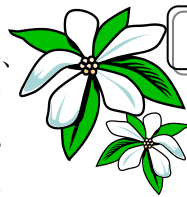
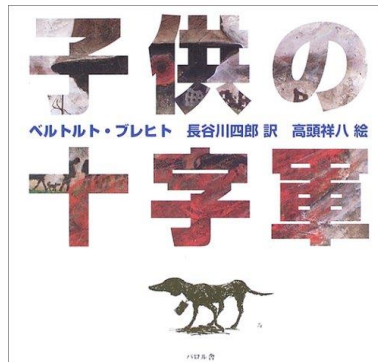
・とってもすばらしかったです。本格的な弾き

語りの朗読は初めてでした。胸にジーンときてまた近くである時はぜひ参加させてください。本当に心の和む時間!ありがとうございました。

・「子供の十字軍」初めて知りました。映像もあって本当に話の中のにめり込む思いでした。戦争の悲惨さと子供の逞しさ……。一鷲さんの弾き

語りもすばらしかったです。またどこかでお目にかかりたいと思います。

・お話と生の音楽と映像のコラボレーションは感情がストレートに伝わってきます。歴史の中の民衆や子供たちに“あったこと”を想像する事はむずかしいのですが、忘れてはいけません。中国や朝鮮であったことにも。“座敷ぼっこ”は絵本の印象では不思議さと神秘ですが、一鷲さんにはこわさがあるのは良いことか? (座間市立図書館ボランティア友の会)



町田市立図書館協議会より

第11期図書館協議会がはじまって数ヶ月がたちました。この間幾つかの事柄について並行して検討してきましたが、少しずつ形が見えてきました。今期は特に一般市民向け図書館オリエンテーション、少し上級向け調べ方ガイダンスなどを実施することで、より図書館に親んでもらおうと考えています。少人数を募集してのオリエンテーションは、年配の方などにも気兼ねなく蔵書検索の仕方などを学んでいただく入門編、レファレンス担当職員によるお話は、一般の方に図書館の楽しさと有益さを実感してもらうためのもので、過去のレファレンス事例を具体例に「こんなことを調べるにはこんな本が!」「こんなことだって図書館でわかるんだ!」とアピールする予定です。身近な、そしてもっとも頼りがいのある図書館をよろしく。(水越)



ひろば

＜3月例会報告＞23日(木)13:00～16:30
於・中央図書館中集會室

出席／伊藤 川野 久保 島尻
前島 中山 増山 丸岡 桃澤

- 会報について・・(原稿をどしどしお寄せください)
- 和歌山静子さん講演会の打ち合わせ
 - ・スタッフは、12時集合/会場設置準備
 - ・役割分担を決める。
- 国松俊英氏100冊出版記念会について
すすめる会でこじんまりとお祝いをしましょう、という
ことで話し合う。幹事は守谷さんと伊藤倭子さん
(巻頭言参照)。
- 2006年度の活動について
 - ・世話人は前年度と変わらず
 - ・半年間の例会日程(予定)が決まりました
場所：中央図書館中集會室
4/20(木)、5/26(金)、6月お休み
7/20(木)、8月お休み、9/21(木)
- 「かえで文庫」が子どもの読書活動優秀実践団
体文部科学大臣表彰を受賞しました。4月23日
(日)「子ども読書推進フォーラム」で授賞式が行
われます。

野津田雑木林との共催イベント

「人と自然」連続講座

人は自然から何を学びどのように自分
たちの暮らしを創り出していったのか
基層文化の一端を実践と理論で考える

I. 原初的炭焼き法 穴やき・伏せ焼きの実践 & お話「炭やきの現代的意義」

4月29日(祝)、30日(日)10時～翌日14時迄
会場：野津田公園ヤマナラシ広場

講師：鶴見武道氏(愛媛大学助教授・えひめ千年の
森を作る会会長) / ゲスト：姫田忠義氏

参加費：大人1000円、小学生500円、幼児200円

II. 記録映画上映「たまはがね—子どもがひら
いた古代製鉄の道」(民族文化映像研究所制
作) & お話「鉄は宇宙からの贈り物 そし
て火もまた」 / 5月14日(日)10:30～
中央図書館6Fホール

講師：姫田忠義さん(民族文化映像文化研究所長)
(問合せ：電&FAX 045-961-5045 久保)

I. ワークショップ

5月14日(土)

15:00～19:00

野津田公園上の原広場

講師：北山耕平氏

一般参加費1500円

学生500円(小学生以下無料)

おはなしボランティア5回セミナー



世界を深く理解するた
めの伝統的耳の訓練法

II. 講演会

「原語から訳されたおはなしの面白さ」

講師：乾 侑美子氏

5月27日(土) 10:00～12:00

町田市民フォーラム学習室/参加費500円

問合せ：まちだ語り手の会事務局

TEL&FAX 042-795-3016 市川.

makatari@at-duplex.bias.ne.jp

★親地連第19期総会記念講演会

トーク・トーク「旅で出あった子どもたち」絵本作家浜田

桂子さん&小林豊さん/5月27日(土)14:00～16:00
(受付13:30～)主催：親子読書地域文庫全国連
絡会・無料/問合せ：045-303-5096 村島

★学校図書館を考える全国連絡会 第10回集会

「ひろこう! 学校図書館」/6月11日(日)/10:40
～記念講演「教育基本法と学校図書館」講師：山口
源次郎さん(東京学芸大学教授)/13:30～「政府の
図書館施策を考える」講師：松岡要さん(日本図書館
協会事務局長)/13:50～実践報告「東京・東大和市
の現状」(東大和文庫連絡会 小穴とみさん)、「荒川
区の現状」(小学校教諭 山本さゆりさん)/14:40
～意見交流・情報交換/主催：学校図書館を考える
全国連絡会/問合せ：03-3816-5271 篠澤

★民族文化映像研究所創立30周年記念シンポジウム

「世紀を超える歷程—基層文化記録の旅—」/7月2
日(日)東京大学弥生講堂・一条ホール12:00会場
13:00閉会/13:10～上映「フロンティアからの
出発(仮題)」14:20～佐藤忠男・川田順三・浜美
枝・姫田忠義各氏によるシンポジウム(問い：徐
士・日/044-986-6461 民族映像文化研究所事務局)

あとがき

図書館の職員研修に呼ばれて、市民との協働とか、
図書館に望むこと等を話す機会を得た。その資料
として提出しようと、前々から気になっていた町
田の図書館運動の歩みをまとめてみた。まだ中途
だが市民の運動が図書館の動きをリードしている
事を改めて確認した。休館日の図書館のホールに、
こんなに職員がいたのかと驚くほど大勢の人が集
まり、熱心に耳を傾けてくださったが…。(M')